



コハクチョウ

名古屋大学博物館友の会

NUM 友の会 ニュースレター

No.72

2023 年秋号

ボタニカルアートサークル講師

東海林富子先生への感謝状

名古屋大学博物館友の会「ボタニカルアートサークル」は2007年にスタートしました。きっかけは一枚の絵景書でした。博物館の野崎さんが東海林先生のご主人（東海林隆次郎先生）からいただいた絵景書に素敵なボタニカルアート作品が載っていたのです。この“科学と芸術”を兼ね備えた東海林先生の絵がお二人を結びつけ、今日のボタニカルアートサークルの骨格ができて上がりました。

これまでに東海林先生のご指導を受けた人は400人以上になります。受講生は『自分の好きな植物をよく見て描きなさい』という先生の教えを胸にサークル活動に参加し、ボタニカルアートの奥深さ、面白さ、そして難しさを体感できた気がします。ある程度でき上がった受講生の作品に先生が一筆入れると、平面的だった絵が急に立体的になったという感動体験は多くの人に共通するものではないでしょうか。この“東海林マジック”に魅せられた人は数えきれません。

東海林先生は博物館の企画展イベントで、作品の制作過程を何回も実演してくださいました。ご自身の画家としてのスキルを惜しげもなく公開して、ボタニカルアートの普及に全力で取り組まれたお姿は忘れられません。ボタニカルアート愛に根ざした先生のご指導のおかげで名古屋大学のボタニカルアートサークル活動は魅力的でレベルの高いものになりました。長年のご指導に心からのお礼を申し上げます。2023年7月8日
名古屋大学博物館友の会代表 足立 守

ボランティアへ応募、ありがとうございました。

71号で会員の皆様にボランティア参加の呼びかけをしたところ、2名の方が応じてくださいました。観察園標本作成補助（YK様）、ニュースレター等発送作業（HF様）のお二人です。お申し出に感謝。



秋・冬に訪れる鳥を求めて

塚本啓互

秋になると夏鳥が繁殖を終え、若鳥を連れて公園



クロツグミ

などに立ち寄りながら南へ帰っていきます。シギ・チドリも同様に若鳥を連れて立ち寄り、体力をつけて南へ帰っていきます。



ミコアイサ



ノゴマ

鳥は習性として同じところに立ち寄ります。またテリトリーの中を移動していますので、私が野鳥の撮影に出かける時には過去に出会ったところを中心に探します。とはいえ野鳥のフィールドは広く、必ず出会える保証はありません。狙いの写真は撮れなくても他の野鳥の写真を撮って帰ることにしています。木立の中で鳥を探すコツとしては、何か動くものがないのか、鳥のさえずる声が聞こえるか、カメラマンが撮っている姿を探し聞いてみる、などでいろいろ手を尽くしてみます。普段歩く時にも聞く耳、見る目を持って頂けたら野鳥が意外と身近なところにいるとお気づきになると思います。探していた鳥に出会えた瞬間の気分は格別です。少しでも野鳥に興味を持っていただけたら幸いです。

←左の写真はヒシクイ

万葉の花 その 10

アシ(ヨシ)

三矢保永

若の浦に 潮満ち来れば ^{かた} 瀉を無み ^{あしへ} 葦辺をさして

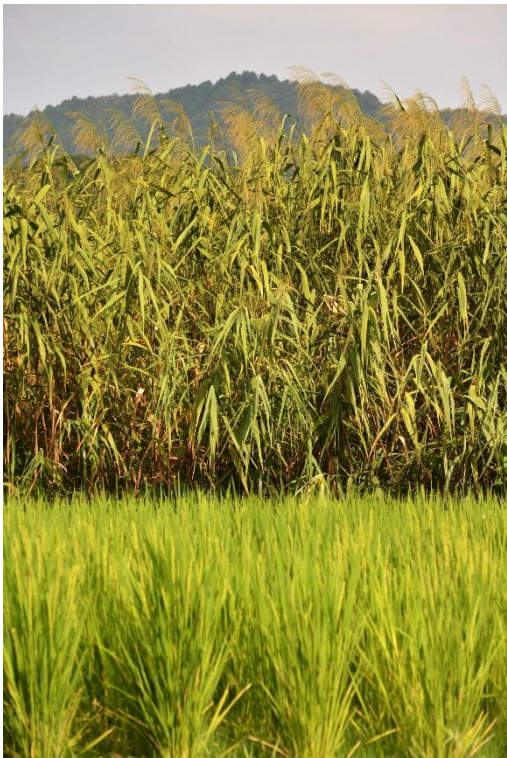
^{たづ}
鶴鳴き渡る

山部赤人 万葉集巻六 919

大意 和歌の浦に、潮が満ちてくると、干潟がなくなるので、葦の生えている岸辺をさして、鶴が鳴きながら渡って行く。

注 当時には“つる”ということばは存在していましたが、歌語としては例外なく“たづ”と詠まれていました。“たづ”は、田鶴（田に降りた鶴）ですが、大きな鳥の総称という異説もあります。若の浦は、現在の和歌浦。葦を詠んだ歌は、集中 50 首もあり（長歌 5 首を除く）、数としては桜と同順位の 5 位です。古代には 日本は“葦原の瑞穂の国”といわれたように、河口・湖の湿地帯は葦で覆われ、そこに多数の鶴を見ることは、ごく当たり前の景色だったのでしょう。葦原は水鳥の格好のすみかで、葦と鶴の組合せは 9 首、葦と鴨は 6 首あります。葦鶴、葦鴨という用法もあります。斎藤茂吉は、写像鮮明、声調も流動的（リズム感が軽快?）と評価しています。古来より、叙景歌の究竟にある名歌とされてきました。

参考文献：斎藤茂吉 万葉秀歌 岩波書店



撮影 写真サークル 五十川真知子
撮影地 滋賀県近江八幡市安土町

「幻の愛知県博物館」

小林身哉

愛知県美術館で開催された展示（2023. 6. 30～8. 27）の報告です。現在愛知県には県立の総合博物館がないけれど、明治時代には

「愛知県博物館」があったのです。パンフレットによると「1878（明治 11）年に県が民間からの寄付金を集めて建てた博物館は、古く貴重な文物から味噌や醤油、酒、木材、織物、陶磁器、絵画、機械、動植物等々、国内外のあらゆる物産を集め、人々の知識を増やして技術の発展を促そうとしました。

まだまだ博物館をどういう施設にすべきか方向の定まらぬ時代に、同館は先進的な商品見本の展示・販売を通じて県下の産業を刺激する商品陳列館へと徐々に姿をかえて行きます。」と書かれています。

これとは別にもう一つの博物館も作られていました。以下解説文から紹介します。

「商品陳列所の展開とは別に、明治時代半ばに奈良坂源一郎ら有志が大須七ツ寺に設立した愛知教育博物館は、私立の博物館として全国的に見ても先駆的な存在でした。同館はのちに尾張徳川家が運営する私立明倫中学校の敷地に移り、明治時代末には鉱物約 1340 種、植物約 1600 種、動物約 2000 種を備える規模となります。1919（大正 8）年に中学校とともに愛知県に譲渡され、1926（大正 15）年に閉館しますが、資料の一部は関東大震災で多くの教材を焼失した学習院に寄贈され、現在に伝わっています。」

名大医学部解剖学の教授だった奈良坂源一郎の骨格標本（左）や朝



ドラ「らんまん」にも出ていた博物館の父と呼ばれる田中芳男の植物標本（下）なども展示されていました。



この愛知教育博物館については、元名古屋大学博物館教授の西川輝昭氏が 2006 年の名古屋大学博物館報告（22 巻 267-276 頁）で詳細に記録しています。今後、更なる解明が待たれます。

Artist Earth 地球は芸術家 22

アンモライト (Ammolite)

足立 守

アンモライト (Ammolite) は、下の写真のようにアンモナイト (Ammonite) の表面が緑・赤・オレンジなどの虹色に輝く生物起源の宝石 (化石であり宝石) のことです。人間業ではとてもできないまさに天然のアート作品です。



典型的なアンモライトの原石 (横約 15cm、Wikipedia より)

アンモライトとアンモナイトは日本語でも英語でも 1 字違いでひじょうに紛らわしいので、二つの言葉の歴史について少し振り返っておきます。アンモナイトは 1789 年にフランスのブリュギエールが古代エジプトの太陽神アモン (Ammon、アメンも同じ) の巻いた角 (写真左) の形に似た化石という特徴から名づけました。それから約 190 年後の 1981 年に、アンモナイト由来の宝石という意味合いからアンモライトという言葉が誕生しましたが、その知名度は命名から 40 年以上経った今も低いままです。

アンモライトがブラックオパールのように美しく輝くのは、アンモナイトが化石になる過程で、化石の表面にアラゴナイト (化学組成は方解石と同じ CaCO_3) という鉱物の薄い層が何枚もでき、その層に光が当たると光の干渉現象が起きて虹色に輝くというのが一般的な説明です。しかし、アラゴナイトの層がどれもきれいに輝くわけではないので、鉱物の中に微量に含まれる V (バナジウム)、Cr (クロム)、Mn (マンガン) などの不純物がアンモライトの発色に関与している可能性は残っています。

アンモライトを構成するアラゴナイトはモース硬

度が 3.5~4 と小さく、しかも薄い層なので、アクセサリー (写真右) にする場合には固いガラスや樹脂で覆うか挟むなどの加工が必要です。トリプレット (triplet) と呼ばれているものはアンモライトをガラスでサンドイッチ状に挟んだものです。

中生代の示準化石であるアンモナイトは日本 (とくに北海道) を含めて世界各地から見つかっていますが、アンモライトの産地は米国との国境に近いカナダ・アルバータ州南部のごく一部に限られています。なぜこの地域の白亜紀後期の地層にのみアンモライトが存在するのかという問いに対する説明も十分ではなく、アンモライト生成の謎は多く残されています。

私がアンモライトを初めて見たのは今から 25 年ほど前。1 限目の授業準備をしていた時に、初対面の若い男性がアポ無しで理学部 E 館の研究室に大きなトランクを引きずってやってきました。自己紹介などは一切なく、「これ本物ですか？」だけを何度も聞いてきました。実験室の机の上でトランクを開けると、直径 40cm ほどの赤緑色の大きな化石が目飛び込んできました。そして、私が「アンモライト、本物！」と言うと、さっとトランクを閉めてエレベータの方へ駆けて行きました。本物の大きなアンモライトでしたが、「訳あり感」も大きな石でした。



左：太陽神アモンの像 (Wikipedia より)



右：アンモライトのトリプレット・ペンダント (横約 3cm、Wikipedia より)

**ボラン
募 集**

友の会では随時ボランティアを募集しています。ニュースレターの発送など、一緒に活動しませんか？

ご希望の方は友の会事務局までお問合せください。

Eメール : hakubututomo@gmail.com

野外観察園 2023 秋

吉野奈津子

今年も本当に暑い夏でした。どれだけ水やりしてもキリがなく、気が休まらない時もありましたが、何とか水切れと暑さを耐え抜いて秋の花が咲き始めています。

この夏、セミナーハウスの展示「顕微鏡で観る野外観察園」に合わせてシコクビエという植物を初めて育てました。英語で finger (指) millet (雑穀) といい、実った穂は確かに指のように見えます。強健な植物なので育てること自体は簡単です。次々と穂が出て開花しました。収穫時期がよく分からなかったのと、茶色く色づいた様子を見てもらいたく、気になりつつもしばらくそのままにしていたところ、9月になり穂発芽(ほはつが)しているのを発見、びっくりです。穂発芽とはムギ類やイネ、トウモロコシなどで収穫前の実った穂から芽が出てしまう現象をいいます。今回は発芽適温だったところに長雨で湿った状態が続いてしまったことが原因だったのでしょう。このシコクビエの苗を実験材料にしている学生さんもあり、食べてみたいね、粉にしてクッキーが美味しいよなどと妄想をめぐらしておりましたが、思わぬアクシデントとなりました。穂発芽を防ぐには実ったものから収穫するしかなく、この辺りは雑穀なので面倒ですね。めでたくクッキーができたらご報告したいと思います。



シコクビエ (イネ科) *Eleusine coracana* (L.) Gaertn.



穂発芽したシコクビエ



(左) チョウマメ (マメ科) *Clitoria ternatea* L.

(右) タヌキマメ (マメ科) *Crotalaria sessiliflora* L.



コムラサキ (シソ科) *Callicarpa dichotoma* (Lour.) K.Koch

名古屋大学博物館友の会ニュースレター 2023 年 10 月 2 日発行

名古屋大学博物館友の会 〒464-8601 名古屋市千種区不老町 名古屋大学博物館 気付

電話 : 052-789-5767 (博物館事務室) F A X : 052-789-5896 (博物館事務室)

Eメール : hakubututomo@gmail.com アクセス : 地下鉄名城線「名古屋大学」下車 2 番出口

ホームページ : <http://www.num.nagoya-u.ac.jp/fan>

年会費 1000 円 (4/1~3/31) 10/1~3/31 に入会した場合は 500 円 (次年度は 1000 円)

家族会員制度あり (同居の家族 1 名まで年会費を免除)

<振込先> ゆうちょ銀行 口座番号 : 00800-8-166807 加入者名 : 名古屋大学博物館友の会

他銀行からの振り込み 店名〇八九 (ゼロハチキユウ) 店番 (089) 当座 0166807